

京都大学	博士(文学)	氏名	藤 田 大 雪
論文題目	プラトンのディアレクティケー — その成立の背景と根拠 —		

(論文内容の要旨)

真理を探究し発見するためには、何をどのように探究すべきか——プラトンにとってこの問いに取り組むことは、哲学を似非哲学から区別する試みそのものであった。同時代のソフィストたちは、大衆に受け入れられているもっともらしい前提やホメロスのような権威を用いて聴衆の耳に心地よく響く弁論を行い、最終的に彼らを説得することが自分たちの知を担保するという考えをもっていた。また、いわゆる自然学者たちも、感覚経験にもとづいたさまざまな知見を提示している。だがプラトンは、彼らのような方法によって真の知識を獲得できるとは考えず、本当の知者であろうとする者(哲学者)ならば、目に見えるものを観察したり感覚されうるものから何かを感じ取ったりするのでなく、ヒュポテシス(hypothesis)の方法や分割総合の方法を用いて〈美〉そのものや〈善〉そのもののようなイデアに接近しなければならないという見解にたどりついた。これがプラトンの「ディアレクティケー」(dialektikē)である。

本論文は、そのようなディアレクティケーの概念の確立に至るまでのプラトンの思考の経緯を、その初期から中期の対話篇の分析を通して解明した。論者は、ディアレクティケーに対して哲学とほとんど同一視されるほどの意義を与える『国家』の記述が、イデアにかかわるヒュポテシスの使用のあり方を示すことを通じて、ディアレクティケーを規定していることに着目する。論者は、このヒュポテシスを使用した探究の方法とイデア論との関係こそがディアレクティケーの確立への主要な動因であると見定め、この点でのプラトンの思考の展開を跡づけている。

各章の概要は、以下のとおりである。

第1章では、プラトンが打ち立てた最初の方法論である『メノン』のヒュポテシスの方法を取り上げて、その内実を明らかにすることを試みている。論者は、方法が適用されている箇所の議論構造を検証して、仮説演繹的方法と理解する伝統的解釈の誤りを指摘し、この方法が、アリストテレスが「還元法」と呼ぶものと同一のものであり、探求の的となっている命題を基点としてその前提となる命題を導出する、いわゆる「逆さまの推論」であることを明らかにした。

第2章から第4章までは、『国家』においてディアレクティケーと不可分に結び付けられているいわゆる「イデア論」の導入の動機とヒュポテシスの方法との関連を汲み取るために、イデア論が最初に導入された『パイドン』の魂不滅の最終証明(95B-107B)を考察した。

まず第2章では、プラトンのライバルである自然学者の方法論が批判されている97B-99D

を取り上げた。プラトンはこの箇所、生成消滅現象を理解するために自然学者が暗黙に用いている説明方式を「1に1を足すと2になる」という形で総括し、この方式に徹底的な批判を加えている。この批判は、従来「原因 (aitia)」という語の意味を変更する試みとして解釈されることが多かった。しかし論者は、そうしたスタンダードな解釈を退け、プラトンが自然学者たちの探求を論難したパッセージの分析をつうじて、自然学的探求への批判とそれに続く新たな原因探求の真意が以下の点にあることを明らかにした。すなわち、自然学者が説明の基本単位として用いる「この肉体」のような感覚的事物は片時も同一性を保つことがないため、「この肉体が別の物体になる」ことや「この肉体が大きくなる」ことが不可能である。そこでプラトンは、生成消滅のために必要な自己同一性をもたない感覚的事物を因果説明から排除して、アイデアと内在性質のような自己同一的なものをつうじた安定的な説明方式を求めたのである。プラトンを新たな原因探求へと導いたのは、このような「生成変化を矛盾なく理解するにはいかなる存在者を立てなければならないか」という存在論的関心だったと考えられる。

第3章では、第2章で取り上げた自然学批判 (97B-99D) につづく箇所 (99D-102A) を分析した。自然学者の探求方法を退けた後、プラトンはこの箇所「ロゴスの中での探求」を導入し、この新たな方法を自然学者の感覚的な探求方法と比較している。多くの研究者はこの比較対照を、97B-99D の自然学批判についてと同様、原因をめぐる一種の概念的な議論と捉えてきた。すなわち、そもそも何かが「原因」である以上それはしかじかの基準を満たしているべきであり、ロゴスの中での探求は基準を満たしているが諸物体の付加分離によって生成消滅の原因を説明する自然学的方法是満たしていない、という論点が問題の議論の核心として捉えられてきたのである。論者はこうした解釈をあらためて批判し、当該箇所描き出されている両方法の対立点が、説明の基本単位となる「真実在」としていかなる存在者を立てるか——アイデアかそれとも感覚的事物か——という点にあるという指摘を行った。つまり、プラトンはここでも依然として概念ではなく存在を論じているのであり、感覚的事物の付加分離による説明方式を再度排撃して、真実在＝アイデアを基本単位とした新たな説明方式の導入を行っているのである。

第4章では、真実在＝アイデアを説明の基本単位として立てたプラトンが具体的にはいかなる仕方で生成消滅の原因を記述したのか、という問題を考察した。伝統的な解釈では、プラトンは 102A-107B でアイデア原因と別個の「より巧妙な原因」を導入しているとされている。論者はこの解釈を退けて、当該箇所の議論が新しい原因の導入ではなく、「アイデア原因が現実世界の生成消滅現象に対する説明能力を有するために必要な要件」の記述を目指したものであることを指摘した。ちなみに、その要件は大略的に述べると以下のようなものである——もろもろのアイデアは互いに完全に没交渉的であるわけではなく、あるアイデアは別なアイデアと「反対的」であるといった形で複雑な構

造をなしている。従来「より巧妙な原因」と呼ばれてきたもの、すなわち「それが何かを占拠した場合、そのものに自分自身のアイデアをもつように強いるばかりでなく、何らかのものと反対関係にある、ある反対的なもののアイデアをもつように強いるもの」(104D1-3)という表現も、実際には「アイデアによって消滅するもの」を厳密に指示するために工夫された定式であり（たとえば、雪は「つねに自分が占拠したものに〈冷〉をもつように強いるもの」であるために反対の〈熱〉の接近によって消滅する）、そうした構造の一部を構成するものにすぎないのだ。

なお、「自己論駁論法」の名で知られるプラトン『テアイテトス』169D3-171E9の議論を取り上げた補論は、アイデア中心の存在論と感覚的事物中心の存在論の対立が後期対話篇においてもなおプラトンの関心事であり続けたことを示すものである。

以上のように本論文は、ディアレクティケーの成立根拠を、『メノン』のヒュポテシスの方法に見られる「哲学の方法」への関心の芽生えと、『パイドン』における存在論への転回（＝アイデア論の導入）とその両者の関係づけに求めた点にある。『メノン』では、ヒュポテシスの方法の導入を契機として、初期対話篇には見られなかった探求方法そのものの性質に関する問題意識がプラトンに現れたと考えられる。さらに『パイドン』では、本論の解釈が正しいとすれば、『メノン』から受け継がれた「正しい方法とそうでない方法の区別」にまつわる問題意識が真実在をめぐる問いに還元されて、方法の問題と存在の問題が結び付けられることになった。一般にプラトンの中期対話篇でのディアレクティケーの本質を構成すると考えられている二つの特質——すなわち、ヒュポテシスの方法の方法を構成要素とすることとアイデアを対象とすること——の帰属根拠は、以上の事情に起因すると考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

「弁証法」という日本語は、特殊で曖昧な哲学用語であり、そこに通常与えられる、正・反・合のプロセスといった通俗的意味は、空疎でさえある。これに対して、その大本にあるギリシア語「ディアレクティケー」(dialektikē)は、プラトンの著作においてはじめて登場するが、そこでは文字通り「ディアロゴスの技術」、すなわち対話・問答の技術ないしは対話・問答にもとづく知を意味していた。しかし、このような一般的で平明な概念がアリストテレスやストア派、さらにはカントやヘーゲルにいたる哲学の伝統のなかで重視され、まがりなりにも継承されるにいたったのも、プラトンに起因するところが大きい。プラトン自身がこの概念に哲学の営みとほとんど同一視されるほどの重要な役割を与えたからである。

ではプラトンにおいて、どのようにしてこの概念が哲学的な重要性をもつに至ったのか。その思考の経緯を解明したのが本論文である。論者は、『国家』においてディアレクティケーの概念が明確なかたちで提示されるとき、この概念がイデアにかかわるヒュポテシス (hypothesis) の使用のあり方を示すことを通じて規定されていることに、あらためて注目する。このヒュポテシスを使用した探究の方法とイデア論との関係こそがディアレクティケーの確立への主要な契機であると見定めたい。論者はこの点に関連するプラトンの思考の展開を跡づけることを試みる。具体的には、ヒュポテシスという概念とそれにもとづく方法をプラトンがはじめて明確に提示した『メノン』、そしてその考察を継承しつつ、イデア論との関連のもとでヒュポテシスを論じている『パイドン』の関連箇所を詳細に検討し、そこからディアレクティケーをめぐる『国家』での本格的な考察への道筋を展望するのである。

こうした本論文の考察が達成した成果の一つは、「ヒュポテシスの方法」と呼ばれるものの方法論的性格について、これまで見落とされがちだったある重要な局面を明らかにしたことである。まず『メノン』でのヒュポテシスの方法については、これまでの解釈のほとんどが、仮説ないし仮設という意味で理解されたヒュポテシスから特定の命題を導出するという仮説演繹のプロセスに注目して、多くの議論を重ねてきた。これに対して論者は、この方法の最も肝要な点は、考察の的となっている命題を起点として、その前提という意味でのヒュポテシスとなる命題を特定し定立するプロセスにあることを、テキストの詳しい分析を通じて論証している。このように、ヒュポテシスの方法のもつ探究的・発見的な局面に光を当てたことは、論者独自の重要な貢献であると高く評価される。また論者は、ヒュポテシスの方法の以上のような局面を、アリストテレスが「還元法」としてこの対話篇からの的確に読みとっていたことも説得的に示しており、プラトンからアリストテレスへの方法論的な思考の継承についても、貴重な示唆を与えている。

もう一つの成果は、ヒュポテシスを措定しそれにもとづいて考察するという『パイドン』で展開されている方法論が、イデア論という形而上学的な理論と密接に関係し

ていることを指摘したことである。『パイドン』では、生成消滅の原因の探求をめぐって、自然学者による説明が批判され、かわってアイデアの存在を措定するヒュポテシスにもとづく説明が示されている。従来の多くの解釈は、こうした議論の展開を、プラトン自身の構想する原因（アイティアー）の概念が満たすべき基準を自然学者たちの原因概念が満たしていないということに依拠して理解してきた。そのためプラトンは、原因の概念の別種の理解を示しただけであるから異なる原因概念を使用する自然学者を批判するのは正当でない、としばしば批判されてもいる。しかし論者は、自然学者への批判のポイントが、説明の基本単位となるものをアイデアとするか感覚的事物にするか、という点にあったとする。論者によれば、自然学者は、その説明の基本単位として用いる感覚的事物が生成消滅を説明するために必要な自己同一性をもたないために、批判されているのである。他方でアイデアの存在を措定するヒュポテシスは、自然現象を説明するための中立的な仮説ないし仮説ではなく、自然のあり方を説明可能なものとする基本前提として導入されたと理解される。『国家』に見られるアイデア論とヒュポテシスとの密接な関係も、このような思考にその源泉が見出される。

従来の解釈が、整合的な読みを得るために、テキストと離れてプラトンに多くの暗黙の前提を帰してきたのに対して、プラトンの方法論が存在論に関与しているとする論者の解釈は、そうした読み込みを不要とする明快な解釈である。いっそうの洗練と補強を要すると思われるものの、プラトンの方法論をめぐる解釈に新たに重要な選択肢を提示したことは、それだけで十分な意義をもつであろう。

以上のように本論文が、プラトンの同時代からきわめて多くの議論がおこなわれてきた論題について、独自の解釈を示し重要な貢献を果たしたことは疑いえないが、いくつかの見過ごせない問題を含むことも指摘されなければならない。第一に、ディアレクティケーが主題的に論じられる『国家』での議論について、論者は概括的な考察を与えるにとどまっている。しかしディアレクティケーの成立の背景を考えるためにも、その確立された形態についてのより詳しい分析が必要であつたであろう。第二に、他の解釈者たちに向ける論者の批判の鋭利さは、自己自身に対しては少し鈍る傾向がある。たとえば『パイドン』での自然学批判がすでにアイデア論を前提としたものならば、その批判は、従来の解釈とは別の仕方ではあれ、論点先取を犯しているという批判を招きかねないが、論者はそうした点についてあまり考慮していない。散見されるいささか強引なテキストの読解も含めて、これらの問題点は論者の自覚するところであるので、今後の研究においてその不足が補われることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2012年9月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。